

嗜好品か薬物か：イエメンが抱えるカート問題

大坪 玲子

Drug or shikohin: Controversial Qat in Yemen

Reiko OTSUBO

Summary

This article aims to identify the differences between legal drugs and shikohin, or something consumed for taste or stimulant effect rather than nourishment including tobacco, tea, coffee, alcohol drinks and non-alcohol drinks, to define the characteristics of qat from both sides of drugs and shikohin, and to discuss the problems of qat in Yemen.

Drugs have been politically defined, not based on the pharmacological properties and the definitions have been changed. Some substances currently treated as drug have been traded legally as shikohin. They spread around the world due to their special effects for the consumers, special profits for the sellers and special revenue for the governments which imposed taxes on them.

Qat, chewing of which fresh leaves produces stimulant effect, was cultivated and consumed as a shikohin mainly in East African countries and Yemen. In 1990s when the Somali Civil War raged and many Somali refugees spread out around the world, qat turned to be a commodity traded internationally.

Western countries other than the UK and Netherlands, recognize qat as an illegal drug. Qat is a sort of identity marker for Somali refugees, but at the same time it became the target of criticism and of exclusion from the countries where they live. Moreover, the fact makes the exclusion much easier that qat trade does not produce profits for the countries and the local people who do not consume qat.

Qat is one of shikohin in Yemen, but it is treated as a drug because it assumes the responsibilities as the root of various evils. It is true that qat has a negative impact on mind, body, families, and Yemeni economy. Nevertheless, making qat a scapegoat is not a solution.

Of course, I do not want Yemeni people to be addicted to qat, but it is their decision whether

they will stop chewing qat or not. It is historically true that prohibiting national shikohin is difficult and stupid. (297)

Key words: qat, drugs, shikohin, Yemen

はじめに

カート¹は主に紅海を挟んだ東アフリカとアラビア半島南部で栽培されている（あるいは自生している）灌木で、その新鮮な葉を噛むと軽い覚醒作用が得られる。カートの原産地はエチオピアだと考えられるが、原産地を同じくするコーヒーが世界的な嗜好品として広まったのに対し、カートが長い間地域的な嗜好品にとどまっていた理由は、鮮度が落ちると覚醒作用が急速に得られなくなるという、長距離輸送に不利な性質による。

1990年代、激化するソマリア内戦によって世界中にソマリア系移民が拡散するのと呼応して、カートも国際的に取引されるようになった。社会に統合されない厄介な移民が持ち込む厄介な代物として、カートを違法薬物に指定する国も出てきた。一方カート輸出大国であるエチオピアやケニア、カートの「ハブ」空港と化しているヒースロー空港を擁するイギリス、カートの輸出入が原則として禁止されているイエメン共和国（以下イエメン）²では、カートは嗜好品として扱われている。カートの扱いは嗜好品と薬物の間で揺れている。

本稿は薬物と嗜好品の特徴を整理しながら、カートの特徴をその両方から捉え、イエメンにおけるカート問題の妥当性を検討する。

I 薬物としてのカート

(1) 薬物とは何か

薬物とは何だろうか。身体や精神に悪影響を及ぼす恐ろしい物質であるイメージが強いが、卑近な例をあげれば、タバコは悪影響を身体に及ぼすことが知られながらも嗜好品に位置づけられている。大麻は薬物であると認識されているが、日本において大麻は栽培、所持、譲り受け、譲り渡しには規制があるものの、吸引そのものは法律違反ではない³。薬物を科学的に定義することは可能なのだろうか。

研究者の中には、合法非合法、効き目の強弱、医療用とそれ以外を問わず、あらゆる向精神作用を持つ物質を薬物に含める立場もある。つまり大麻、コカ、コカイン、アヘン、モルヒネ、ヘロイン、メタンフェタミン、その他の半合成物質や合成物質だけでなく、アルコールやカフェインを含む飲料、タバコまでも薬物として扱うという立場である[コートライト 2003: vi]。言い換えると、タバコ、酒、茶やコーヒーも、それぞれニコチン、エチルアルコール、カフェインと

いう中枢作用性の化学物質を含んでいるため、喫煙、飲酒、喫茶は、薬物の反復自己投与行動と見なすことができる[田所 1998：141]。

しかし少なくとも日常的な使い方から考えると、ニコチン、エチルアルコール、カフェインは薬物という言葉で言及されるものではない。ということは、薬物とは単に向精神作用を持つ物質のことを指すわけではなく、その使用が法律などによって禁止または統制されたもの（あるいはされるべきもの）であるという意味を、そこに含んでいることになる[佐藤 2006：8]。薬物は法律で禁止や規制されているものであって、その性質を薬理的に分析した結果ではない。そのため薬物と分類されるものに対しては国際的な基準や規制が求められてはいても、各国の対応が分かれることになる。そしてある物質を薬物として扱うかどうか時代とともに変化してきた。

(2) 薬物と政策⁴

現在薬物と考えられている多くの物質は、20世紀初頭まで盛んに国際的に貿易され、病気や怪我を治すためのクスリ⁵として広まった⁶。そしてそれが禁止されたのは、効果が危険視されたというよりも、その効果によると見なされる犯罪や、そのクスリをもたらした外部に対する嫌悪感、時にはナショナリズムにも発展した排斥意識が、大きな役割を果たしたという佐藤（2008）の指摘は興味深い。アメリカにおいてアヘンは中国人移民と、コカインは南部のアフリカ系移民と、マリファナはメキシコ人労働者と関係づけられ、さらに犯罪と結びつけられて規制された。日本において覚醒剤は朝鮮人や共産主義と関係づけられた。いずれも「悪は外部から来る」という考え方である。

薬物を外部からの象徴として、「ゼロ寛容」政策をとるのがアメリカや日本であるとする、ハーム・リダクションと呼ばれる、薬物およびその使用者を内部に包摂した政策をとるのがイギリスやオランダである。イギリスでは20世紀初頭から1971年まで、薬物使用やその嗜癖といった逸脱を投獄や罰金などによる刑罰的対応ではなく、治療という医療的対応に置き換える置換療法(メンテナンス)⁷がとられた。オランダでは1976年以降、嗜癖者には医療的にアプローチする一方で、ソフトドラッグ(マリファナとハシーシュ)とハードドラッグ(ヘロインやコカイン)を区別し、前者の所持と使用は非犯罪化した。後者の所持と使用は違法とした。これは「ノーマライゼーション」という考え方で、薬物はタバコやアルコールのようにすでに社会に堅い足場を築いてしまっているという前提に立ち、そうであるならば薬物使用者を社会の中に統合して、使用者やその環境あるいは社会全体に対して薬物がもたらす害を低減することを求めるという考え方である。

アメリカや日本の政策が、問題発生可能性を刑務所などに隔離することで「われわれ」という同質な秩序を実現する(正確に言えば、実現しようとする)ものである一方、オランダやイギリスは問題発生可能性を秩序の中に保存しながら管理する立場である。

(3) 規制対象としてのカート

紅海沿岸地域では、カートの使用は数百年遡ることが可能であるが、薬物の調査対象となったのは20世紀半ば以降のことである。カートの国際的な調査は、1935年国際連盟のアヘンやその他の危険薬物の密貿易に関する諮問委員会 (the Advisory Committee of the League of Nations on the Traffic in Opium and other Dangerous Drugs) によって行われた。その後1957年に国際連合麻薬委員会 (the United Nations Commission on Narcotic Drugs) は、カートの性質と使用状況、化学的薬理的なデータ、カート使用による影響を調査した。WHOはカートの医学的様相に関する調査を依頼され、1964年に報告書が同委員会に提出された[UNODC 1980]。しかしどちらの時も国際的なレベルでの対応は起こされなかった。

国際連盟、国際連合の調査と前後して、イギリスやフランスは植民地においてカートを規制しようとした。イギリスは英領ソマリランドでは1921年にカート栽培とライセンスを所持しない商人による販売を禁止し、ケニアでは1934年にカートの所持を、翌年には使用も禁止し、1957年にアデンでのカート輸入を禁止した。フランスは1957年に仏領ソマリランドでのカートの輸出入、栽培、所持、売買、使用を禁止した。しかし英領ソマリランドでは禁止後もエチオピアからカートが密輸され、1957年に現状を追認する形で解禁された。この時カートの空輸は禁止され、陸上輸送に制限されることとなった。またアデンではアデンを取り囲む保護領ではカートは禁止されず、カート輸入禁止で税収が減ったため、翌年に解禁された。仏領ソマリランドでもカートは輸入および使用され続けた[UNODC 1956; Brooke 1960 : 56-57]。

1971年に国連麻薬委員会は国連麻薬研究所 (the United Nations Narcotics Laboratory) にカートの化学的な調査を依頼し、WHOにもカートの薬理的調査を続行するよう要請した。麻薬研究所はケニア、マダガスカル、北イエメンからの新鮮なカートとフリーズドライのカートを使って調査を進め、カートの化学的な構造が明らかになった[UNODC 1980]。

カートの主な成分はcathineと考えられていたが、1975年に新しい化合物が新鮮なカートの葉から特定された。これがcathinoneである[UNODC 1980]。現在では後者がカートの主な効果の原因であると考えられている。カートを噛むと軽い覚醒作用が得られるのはこのcathinoneによるものであり、効果はアンフェタミンに似ている。cathinoneの発見が遅れたのは、鮮度が落ちるとcathinoneはcathineに変化してしまうからだと考えられる。

現在のところ、国際機関ではカートを特に危険視していないようである。WHOはカートを「深刻な中毒性薬物 (a seriously addictive drug)」と分類していない[Al-Mugahed 2008 : 741]。雑誌*WHO Drug Information*でもカートを分析した記事はない。またUNODCの2009年の報告書においても、カートはエチオピアとケニアでの濫用が、表で示されているにすぎない⁸。カートの国際的な注目度が低い理由は、他の薬物に比べれば心身への効果は大きくなく、1990年代以降世界的にカートの消費地域は拡散しているものの、消費する人口が限定されていることが指摘できる。

WHOやUNODCはカートを深刻に捉えていないが、薬物かどうかは各国の判断に委ねられている。アラブ諸国の対応を見ると、スーダンとエジプトはカートの栽培と輸入を禁止している。サウディアラビアでは1971年にカートの栽培、販売、使用を禁止し、違反者は2～15年の懲役が科せられる[Gatter et al. 2002：49]。しかしイエメンからサウディアラビアへのカートの密輸は筆者もイエメンの生産者や商人から聞いたことがあり、また他の報告書でも指摘されている[FAO 2002：60; ACMD 2005：11]。年間2億ドルものカートがサウディアラビアに密輸されているともいわれている[Yemen Times 2004：715]。

ヨーロッパ諸国において、カートに対し比較的寛容な対応をとっているのがイギリスとオランダであり、禁止しているのが北米とスカンジナビア諸国である⁹。イギリスではカートの輸入と使用は合法である。1971年の薬物濫用法では、カートに含まれるcathineとcathinoneはClass Cに分類¹⁰されている[ACMD 2005：6]。カートからこれらの物質を抽出することは違法であるが、カート自体は所有、使用ともに規制されていない。規制の必要性は指摘されている[Gough and Cookson 1984：455]が、カートを薬物として規制しないで現在に至る。現在では1週間におよそ7トンのカートがヒースロー空港に到着し、イギリス各地だけでなく、他のヨーロッパ諸国や北米へ空輸されている。ヒースロー空港はカートのハブ空港なのである[Cox and Rampes 2003：457]。

アメリカではカートは違法薬物と認定されている。麻薬取締局はcathinoneをSchedule Iに、cathineをSchedule IVに分類している¹¹。リストに登録されたのは後者が1988年、前者が1993年である。しかし実際アメリカでは、ヨーロッパ諸国よりも高額でカートが取引されている。

カナダとスウェーデンは、ソマリア系移民の増加によってカートの規制を強化した。カナダはハーム・リダクション政策を実施していたが、カートに関してはアメリカに追随した。カートはもともと食品医薬品法によると合法物質で、ライセンスがあれば輸入できたが、1997年にカートの所有と輸入が違法となった。その結果カート売買は地下活動化し、カート商人は麻薬密売人となった。カートを違法にしても、ソマリア系移民のカナダ社会への統合は進まず、しかもカートは密輸され続け、カート禁止以降カートはグラム当たり40カナダドルから50カナダドルへ値上がりした。密輸されるカートの多くはロンドンから、少量はアムステルダムから運ばれる。スウェーデンにおいても、カート市場は違法薬物の市場と同じ様相を呈しているが、それでもカートは空路や陸路で運搬されている。スウェーデンではカートが手に入りにくいためにアルコール飲料を求めるソマリア系移民や、週末デンマークへ行く（同国ではカートは禁止されているが、嘔むことは所有と見なされない）ソマリア系移民もいる[Anderson et al. 2007：195-203]。

1990年代以降カートが世界各地のソマリア系移民コミュニティに運ばれていくのと並行して、移民コミュニティにおけるあらゆる社会問題がカートに関係づけられるようになった。HIV/AIDSの感染拡大から、離婚率の増加、育児放棄、モラルの低下、犯罪の増加、家計への負担、他の薬物濫用やアルコール中毒の増加、あるいはカートを嘔むと攻撃的になるからソマリアでは

内戦が始まったという説明、カート貿易がテロリストに資金を提供するかもしれないという懸念まで[Anderson et al. 2007 : 104-105, 109, 114, 172, 176]、ありとあらゆる社会問題がカートに帰せられ、カートが一種のスケープゴートとなっている[Anderson et al. 2007 : 114]といえる。カナダとスウェーデンの事例から明らかなのは、違法化によってカートの流通、消費が把握できなくなっただけでなく、カートの規制強化が当該社会への移民の統合を導いていないことである。移民問題が薬物問題にすり替わっているだけで、移民問題の解決になっていない。カートそのものの効果ではなく、外部からの象徴として移民と一緒に社会問題化されるのは、すでに指摘したアメリカや日本の事例と同様「悪は外部から来る」態度と同様である。

ACMDの報告には、イギリスではカートの使用や売買が組織的な犯罪と関連する証拠はなく、カートの使用が家族崩壊の原因となるとはいえず、カートと精神病の関連を示す研究もほとんどなく、カートの消費はイエメン、ソマリア系移民に限定されていてそれ以外の国民に広まっているわけではなく、カートは薬物濫用法に分類するに十分な調査結果はない[ACMD 2005 : 15, 19, 28]とある。イギリスはヨーロッパ随一カートに対し寛容な立場をとるが、その立場は、多くのカート・コミュニティを抱えているにもかかわらず、このような冷静な判断に基づいている。

II 嗜好品としてのカート

(1) 嗜好品とは何か

酒類、タバコ、コーヒー、茶などを含む嗜好品という表現は日本語独特のものである。高田は次のように嗜好品を定義している。①「通常の食物」ではない。だから、栄養・エネルギー源としては期待しない。②「通常の薬」ではない。当然、病気への効果は期待しない。③生命維持に「積極的な効果」はない。④しかし「ないと寂しい」という感じがする。⑤体内に摂取すると「精神(=心)に良い効果」がもたらされる。⑥「植物素材」が使われる場合が多い[高田 2004 : 4-5]。

この定義に若干の補足をしたい。①に関して、ジャガイモが入ってくるまで、ビールはヨーロッパの広範な層にとってパンと並んで重要な食物だった。17世紀後半、イギリスの家庭では子供も含めて1日1人あたりおよそ3リットルのビールを消費した[シヴェルブシュ 1988 : 23-24]。ビールにはミネラルやビタミンが豊富に含まれていて、実際20世紀になってもビールは食事の重要な一部であると考えられている。現在でもパブでビールだけで食事を済ますイギリス人は少なくない[飯田 2008 : 128]。

②③に関していうと、現在嗜好品として見なされているものが、それが広まる時にクスリとして治療効果が期待されていたこともある。栄西[1141-1215]は『喫茶養生記』で、中国の古典を引用しながら茶の様々な効果を紹介している。利尿、眠気醒ましのみならず、寿命を延ばす、心臓を強くする、精神を調える、内臓(五臓)を和らげる、身体の疲労を除く、酒を飲んだ後に茶

を飲むと食べたものの消化が良くなるといったものである[古田 1982]。イギリスでは茶は精力増進、頭痛、不眠、胆石、倦怠、胃弱、食欲不振、健忘症、壊血病、肺炎、下痢、風邪などに効果があると宣伝された[角山 1980：36]。ヨーロッパに紹介されたコーヒーの効用は鼓腸を防ぐ、肝と胆を強化する、水腫に効き目がある、血液をきれいにする、胃を調整する、食欲を刺激する、食欲を抑制する、眠気を取る、睡眠を促す、激しやすい気質には鎮静効果、さめた気質には昂進効果があるなど、一言でいうと万能薬であった[シヴェルブシュ 1988：20]。またタバコもヨーロッパでは万能薬としてもてはやされ、頭痛、鬱病、すべての胸部疾患、胃や内臓の閉塞症、便秘、腎臓結石、寄生虫駆除、腫れもの、歯痛、凍傷、毒矢の解毒、止血などに効果があるとされた[上野 1998：58]。酒は百薬の長ともいわれるが、アルコールもまたクスリに用いられた過去を持つ。ワインは最も古い薬の一つで、ブドウ栽培を行った社会ではすべて病気の治療に使われた。ギリシャとローマの医者は傷薬、解熱剤、利尿剤、そして気付け薬としてワインを勧めた[コートライト 2003：96]。フランスでは少なくとも19世紀までアルコールは強壯剤や虫下しに使われた。虚弱な子供には強いワイン（マラガ、マディラ）を、貧血の子供にはグロッグ（温めたアルコール）を、生後数ヶ月の子の下痢には砂糖水にオー・ド・ヴィ（ワインを蒸留したもの）を混ぜて飲ませた[ヌリッソン 1996：159]。現在は「通常の薬」と見なされない嗜好品は、特にそれが広まる初期の段階において「生命の維持に積極的な効果」が期待されたクスリだった。

高田の定義に3つ追加したい。まず嗜好品は社交の場に欠かせない道具であり、時には新しい社交の場を提供しながら社会に広まったということである。前者は日本の酒の飲み方を思い浮かべれば[渋沢 1955; 柳田 1979]、後者は千利休が「四民平等」を目指した日本の茶の湯[矢部 1995：234; 村井 1987：59]や、時には政治さえ動かしたヨーロッパのコーヒーハウス[小林 1984]を思い浮かべればいいだろう¹²。

次に嗜好品は「栄養・エネルギー源」でもなく「生命維持に積極的な効果」もないため、一種の奢侈品として課税対象となってきたことである。日本において、タバコ、酒類への度重なる増税は、消費の人気と消費者の嗜好を物語っている[宮本 1999; 村上 2001]。フランスにおいても政府は酒類の専売権と税制運営によって国民のアルコール飲料消費量を抑制し、なおかつ軍事費を確保した[ヌリッソン 1996：257]。第二次世界大戦下のイギリスでは国民の士気を高めるためにビールを配給制にしなかったが、税収を確保する手段として税率は3回引き上げられた[飯田 2008：207-208]。課税対象としての嗜好品は、為政者には二重の意味で魅力的なのである。

そして「通常の食物」でも「通常の薬」でもなく、「生命維持に積極的な効果」はないにもかかわらず、「ないと寂しい」という気持ちと交易から得られる莫大な利益が、コーヒー、紅茶、タバコを世界中に広ませる原動力となった[角山 1980；上野 1998；ペンダーグラスト 2002]。この3つの嗜好品が植民地や奴隷制と関係して生産量を拡大させたことも思い出すべきであろう¹³。

(2) 交易品としてのカート

長距離移送に向かない性質を持つカートは国際化の歴史が比較的浅い¹⁴。紅海東側沿岸の資料に交易品としてカートが登場するのは、19世紀のアデンである。アデンは1839年にイギリスの支配下に入り、国際的な港として発展を始めた。カートの栽培が不可能なアデンでは、19世紀半ばにカートはアラブ人に消費され、少数のカート仲介業者が1000%もの利益を得ていた[Gavin 1975 : 58]。しかし当時のカートがどこから輸送されていたのかGavinは述べていない。

アデンへのカートの具体的な経路がわかるのは20世紀になってからである。当時アデンにカートを提供したのは主に北イエメン（当時はオスマン朝支配下）とエチオピアであった。階級の低い人はタイズ州の南部にあるMaktariのカートを、豊かな人々はMawiya¹⁵のカートを嚙んでいた[Gavin 1975 : 119]。タイズ州の他にイップ州からもカートがアデンに輸出されていた[Messick 1978 : 273-274]。北イエメンからのカートはラクダで運ばれ、イギリス支配下のラヘジに到着するまで3日かかり、ラヘジからアデンまでは車で運搬された[NID 1946 : 492]。

1960年代前半ではアデンのカート輸入量は2000トン前後であり、エチオピア、北イエメン以外にケニアやソマリア共和国（1960年に独立）からカートが輸入されていた（表1）。アデンへ輸入されたカートは、さらにアデンの外へ輸出されていた。1960～63年のデータでは保護領（≒アデンを除く南イエメン）の他、紅海にあるカマラーン諸島、イギリス本土、仏領ソマリランド、バーレーン、トルーシャルステーツ¹⁶へ輸出された（表2）。また1956/57年のアデンの歳入を見ると、カートはタバコ、内燃機関用燃料には及ばないが、課税されある程度の財源となっていたことがわかる（表3）。同年から1961/62年まで、カートの徴税額は5万7499ポンドから31万6310ポンドにまで年々増加した（表4）。

【表1】アデンへのカート輸出国と輸出量（トン）

	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966
ケニア			17	8	6		
エチオピア・エリトリア	1754	2200	1841	2061	947		
ソマリア共和国		1					
北イエメン	87	62	159	607	1547	2443	2286
合計	1841	2263	2017	2676	2500	2443	2286

（出所）Statement of External Trade（1962: 128, 1963: 104, 1964: 120, 1965: 120, 1966: 115）
より筆者作成。

【表2】アデンからのカートの輸出量（キログラム）

	1960	1961	1962	1963
アデン保護領	54,772	14,652	125	
カマラーン諸島	3	17	9	
英国本土	166	9	46	199
仏領ソマリランド		4		4
バーレーン		61		
トルーシャルステーツ	13			
合計	54,942	14,744	180	203

（出所）Statement of External Trade（1962: 244, 1963: 193, 1964: 214, 1965: 214, 1966: 212）
より筆者作成。

【表3】1956/57年のアデンの歳入（一部）

税の種類	ポンド
所得税	526,545
物品税	57,355
タバコ税	77,228
内燃機関用燃料税	69,933
カート税	57,499

(出所) Annual Report (1957: 2) より筆者作成。

【表4】アデンのカート徴税額

年	1956/57	1957/58	1958/59	1959/60	1960/61	1961/62	1962/63
ポンド	57,499	51,504	201,449	257,788	268,421	316,310	279,881

(出所) Annual Report (1957: 13, 1958: 3, 1959: 12, 1960: 12, 1961: 12, 1962: 12, 1963: 12) より筆者作成。

カート輸出国に目を転じてみると、エチオピアはアデン以外に仏領ソマリランドへもカートを輸出していた。これはまず鉄道の恩恵によるものである。1897年にジブチ港からエチオピアへ延びる鉄道の工事が着工され、1902年に後にエチオピア第2の都市になるディレ・ダワまで完成した。ディレ・ダワを拠点にコーヒー、皮革、象牙がジブチ港から輸出されるようになった。オロモ人が19世紀末に大規模にイスラームに改宗し、遊動生活をやめて定住農耕民となり、カート栽培を始めると、それまで地元のエリートが主に消費していたカートも、ディレ・ダワを経由して仏領ソマリランドへ、さらにアデンへ輸出された[Gebissa 2004: 13, 48, 52-53]。

エチオピアのカート輸出量は、イタリアによる道路開発によって1920年代の終わりから増加し、さらに1949年にディレ・ダワと仏領ソマリランドが空路で結ばれると、仏領ソマリランドやアデンへのカートの輸出が増加し、空路ができて20年でカートはエチオピアで第5の輸出品となった[Gebissa 2004: 55, 86-89]。Brookeは「最近カートは商業的に重要な位置を占めるようになった」[Brooke 1960: 52]といている。限られた資料ではあるが、20世紀中頃までに、カートは紅海を挟んだ地域で活発に取引されていたことは確かである。その背景にはエチオピアにおける鉄道、道路、空路開発がある。

20世紀半ばまでのもう1つのカート輸出国は北イエメンである。現在イエメンではカートの輸出入が禁止されているが、1970年代まで北イエメンはカートを輸出していた。北イエメンの統計によると、カートの輸出は1974年まで行われていたことがわかる(表5)。この資料では輸出先まではわからないが、カートは正式な輸出品であり、SITC(標準国際貿易分類)も公表されていた¹⁷。

【表5】北イエメンのカート輸出額

年	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974
1,000 リヤル	1,073	3,317	1,599	—	—	2,186	4,338	2,798	1,031	676	5

(出所) NYSY (1971: 47, 1975/76: 92, 1976: 84) より筆者作成。

1960年代後半、北イエメンの輸出額はコーヒー生豆が1位であり、カートは2位か3位を占めていた。1970年もカートはコーヒー生豆に次いで2位で、全体の輸出額1575万9166 リヤルのうちカートは433万7604 リヤル、つまり全体の27.5%がカートの輸出で占められていた。1971年からは原綿が輸出第1位となり、カートの輸出は1970年をピークに減っていき、1974/75年からはデータが抹消される¹⁸（表6）。

【表6】北イエメンの1960～1970年代の主な輸出品（リヤル）

	1964	1965	1966	1969	1970	1971	1972	1973	1974/75	1975/76
羊、ヤギ、馬	884	240	1,598			2,000	733,141	691,732	443,000	6,000
バター	556		430			19,687	12,500	31,800		
卵	13,910	11,452	9,956		2,698	3,900				
魚				6,287	123,096	23,302	229,260	535,964	737,000	325,000
果物・ナッツ類	48,186	33,327	88,167	535,668	106,253	85,785	20,995	217,294		
野菜	30,691	64,850	39,705	481,789	355,774	232,200	258,212	540,217		
蜂蜜			430					119,726		
コーヒー生豆	2,111,875	2,070,828	1,708,089	7,754,569	8,085,525	4,582,409	5,343,570	6,015,952	4,972,000	7,983,000
タバコ		115	2,188		18,060	2,290		61,342		
皮革	408,850	488,519	1,142,565	4,017,101	1,195,312	2,039,483	3,262,434	5,472,385	4,404,000	8,040,000
綿実	3,748		265,590	501,152		777,175	724,000	2,046,330	2,766,000	362
原綿	1,083,600		1,378,534	945,045		7,986,195	7,154,300	17,796,412	28,188,000	24,221,000
南京袋					1,613		14,500			
石膏				700						
塩		972,000	972,000	1,350,699	1,489,182	2,383,694	661,004	30,457		1,000
鉄屑				130,677	8,244		21,636	234,675		
アルミニウム屑					2,460	247,340				
電池屑					763					
染料植物			4,329					3,253		
カート	1,073,077	3,317,057	1,599,091	2,186,468	4,337,604	2,798,095	1,031,469	72,463		
綿製敷物	26,135	15,555	13,746							
綿製衣料品	41,703	23,333	20,619	8,292	18,010	9,220				
切手				24,825						
バスケットなど	15,297	18,285	35,744	666	8,372	24,475	15,000	19,000	11,000	
バスケット							636,000	1,315,000	1,131,000	2,093,000
その他		7,585		13,497	6,200	353,537			52,966,000	50,036,000

（出所）NYSY（1972, 1973, 1974, 1975/76）より筆者作成。

1970年代に入ると、サウディアラビアや南イエメンを含む周辺諸国でカートの消費や売買が規制されるようになり、北イエメンのカートは専ら国内で消費されるようになった。北イエメンは1990年に南イエメンと統合してイエメン共和国となったが、統合イエメンにおいても北イエメン時代と同じようにカートは国内で生産、消費される状態が続いている（ただし実際には密輸が行われていることはすでに述べた通りである）。

輸出を禁止したイエメンに対し、エチオピアは輸出を続けた。エチオピアのカート輸出は、1970年から1990年代初めまでECEA（Ethiopian Chat Exporters Association）が独占していた。1990年代初めに市場自由化が行われ、現在では輸出は主にECEA、Berawako、BIFTU、Koulmiyehの4大会社によって支配されている。エチオピアのカートはオーストラリア、アジア、ヨーロッパ（98%がイギリス）、中東、アフリカ（主にジブチとソマリア）、北アメリカに輸出されている。カートの輸用量と輸出額もここ25年で急速に増加し、1990年代終わりには脂肪種子や皮革より経済的に重要になり、輸出額で第2位となった。ケニアにおいてもカートは価値のある商品作物であり輸出品である。ケニア産カートの輸出が増えたのは近年のことで、扱っているのはソマリア系商人である。カートは夕方梱包され、夜間に陸路でナイロビのウィルソン空港へ

運ばれ、翌朝ソマリアへ空輸される。またジョモ・ケニヤッタ国際空港からオランダ、デンマーク、ロンドンへも空輸される[Anderson et al. 2007]。

カートは紅海を挟んだ地域で交易される嗜好品から、世界各地に空輸される国際的な商品となった。エチオピアは長い間カート輸出国であるが、北イエメンは途中で輸出をやめ、その後ケニアが新たな輸出国となった。輸出量が増加した要因と、空輸された先で嗜好品として扱われるかあるいは薬物として規制されるかについてはすでに述べた通りである。

Ⅲ イエメンにおけるカート問題

イエメンのカート研究は1970年代に集中している。当時の研究者たちが注目したカートの長所は社交の機会の提供、話し合いの場という点である[Gerholm 1977; Serjeant 1983; Weir 1985]（いずれも調査は1970年代に行われた）。イエメンではカートは昼食後に個人宅に集まって3～4時間かけて噛むことが多いが、喫茶店が男性の社交の場となっている他の中東諸国と異なり、喫茶店にそのような機能がないイエメンでは、男性だけでなく女性にも¹⁹カートが社交の機会を提供している。カートは結衆つまり衆を結ぶ手段であり、カートを噛まないこと、カート・セッション²⁰に参加しないこと、1人でカートを楽しむことは反社会的な行動として考えられた。現在では消費形態が多様化しているが、結衆の手段としてのカートの役割はなくなっていない[大坪 2005]。

結衆の手段としてのカートはイエメン研究者から好意的に評価されてきたが、「通常食物」でも「通常薬」でもないカートは、様々な社会問題の根源と見なされてきた。本章ではカートの抱える問題とその問題の妥当性を検討したい。

(1) 身体への影響

カート研究が盛んになった1970年代から指摘されてきた身体への影響は、不眠症と食欲不振である。これは主にcathinoneの効果によるものである。カートを噛むと血糖値が下がるので、糖尿病に効く、喘息に効くなどのプラスの側面もある[Gatter et al. 2002 : 1]が、むしろカートを噛むと口内炎、食道炎、胃炎、便秘になるなど、マイナスの側面が多い[Gatter et al. 2002 : 5-6]。

薬理的な分析がどうであれ、発症は個人差が大きい。筆者の知る限り、上にあげたすべての症状を自覚し、苦痛に感じている消費者はいない。長距離タクシー運転手や工場の夜勤労働者たちはカートを眠気覚ましに利用している。極端な例であるが、「カートを噛まないで眠れない」との発言もある[大坪 2005 : 185]。

カート栽培に使用された農薬が葉に残り、それを口にする事でガンが増加しているとの指摘がある[World Bank 2007 : 2]。またカートによる泌尿器系統、消化器官、肝臓、生殖組織、呼

吸器系への影響、心筋梗塞との関係も指摘されている[Al-Motarrreb et al. 2002 : 407]。しかしながらカートと特定の疾病との因果関係はまだ不明な点も多い。cathinoneは依存症を引き起こす成分であることは動物実験で確かめられたが、カートに関しては実際に依存症を引き起こすかどうか意見が分かれる[Cox and Rampes 2003 : 458]。

カート研究において、長時間咀嚼を続けることは考慮されていない。例えばガムを噛み続けると、唾液の分泌が促され免疫力が高まり、成人病予防にも大きな役割を果たすことや、脳細胞を刺激し精神活動が高揚し、仕事の能率をよくすることにつながるということが明らかになっている[窪田 2002]。そのためカートに含まれる成分から得られる効果だけでなく、長時間咀嚼を続ける行為にも注目するべきであろう（日常生活で数時間も咀嚼を続けることは非常に稀である）。

タバコや水ギセルをカートと一緒に消費することも研究されていない。カートは閉め切った部屋で噛むことが多いため、喫煙者が多いとタバコの煙が部屋中に立ちこめることになり、受動喫煙による健康への影響が考えられる。カートだけが分析対象とされるのは、実際の消費方法と乖離しているといえる。またカートを噛む時に一緒に水分を摂取する。ミネラルウォーターや水道水が多く、個人差はあるものの0.5～1リットルかあるいはそれ以上飲んでいる。サナアは普段から空気が乾燥しているため、カートを噛んで水分補給することは望ましいだろう。しかしカートと水分補給の関係もまた研究されていない。

(2) 心理的な影響

カートによってもたらされる精神的な影響には多幸感、陶酔感がある。またカートを噛むと集中力が高まるため、大学生や高校生は試験勉強をするために噛むことが多い。これらは主にcathinoneによって引き起こされることがわかっている。

カートはより抽象的な影響も及ぼしうると指摘されている。Variscoは、急激な社会変化が起こっている中で、カートを噛むことがイエメン人であることの象徴となっていると主張している[Varisco 1986, 2004]。彼はイエメン人のナショナル・アイデンティティが1970年代以降に形成されたものと考えているが、現在のイエメン共和国の領土の大部分は、はるか昔からヤマン(al-Yaman)と呼ばれていた地域とかなり重なり、ヤマンと、Variscoが調査を実施した1978～79年当時の南北イエメンがそれほど断絶したものであるとは考えられない。また国境の設定に国民がとまどうほど南北イエメン政府が強大であったわけではない。Variscoの指摘するように現実逃避としてカートが使われていることを否定することはできないが、イエメン国外の移民社会はともかく、少なくともイエメン国内においてカートがアイデンティティ・マーカーであるとはいいすぎであろう。

またカートとイエメンの後進性を関係づける議論もある。カートがあるため昼食が1日の食事の中心となり、長時間座っているのに適した伝統的な服装を着続けているなど、西洋化されず、新しい文化が広まらないというものである[Gatter et al. 2002 : 40]。そもそもカートを噛むこと

自体、伝統的な文化ではなく、北イエメンでは1970年代以降、アデンを除く南イエメンでは1990年代以降に広まったきわめて近代的な文化である。昼食が1日の食事の中心となるのはカートが広まったからではなく、イエメンに限らずアラブ世界に広く見られる慣習である。伝統的といわれる男性の白いワンピースはサナアではザンナと呼ばれるもので、カートを禁止しているサウディアラビアでも着用されている。白いザンナを着るのは1962年の革命以降のことで、ザンナもきわめて近代的な服装である。日常的にズボンを履いて生活し、そのままの格好でカートを嗜む男性も、筆者の知る限り少なくない。

(3) 家計・家庭への影響

カートは家計に大きな影響を及ぼす。家計の食費のうち穀物は14.8%、肉類は10.3%であるのに対し、カートが8.6%を占めている[Gatter et al. 2002 : 47]。貧困世帯では収入の28%がカートに費やされている[World Bank 2007 : 2]。イエメン人のカロリーや蛋白質の摂取量は中東でも最低レベルに近いが、加えて貧困家庭ではカートが必要な栄養の摂取を妨げている[FAO 2002 : 2]。

カートを嗜むと家庭が崩壊する。なぜならカート・セッションは男女別に開かれるため、父親と母親のどちらか一方でもカートを嗜むと、夫婦が分かれることになり、子供の世話をしなくなるからである。カート代が家計の支出の10%近くを占めるため、十分に栄養のある食事を摂ることもできない。子供の教育費が圧迫され、退学率が上がる[Gatter et al. 2002 : 33-35]。

しかし興味深いことに、FAOによると、サナア市では家計および食費に占めるカートの割合は、1977年以降減少している。家計全体に対するカートの割合は1977年では16.38%、1987年では12.6%、1992年では12%、1998年では9.85%である。食費に占めるカートの割合は1977年では26.28%、1987年では23.2%、1992年では19.56%、1998年では19.5%である[FAO 2002 : 70]。この結果から、カートが家計を圧迫しなくなっているといえる。日本の総務省統計局の家計調査を見ると、平成20年において教養娯楽費は10.9%である²¹。カート以外の娯楽がほとんどないイエメンにおいてカート代≒娯楽費が10%というのは、はたして大きな数字といえるのだろうか。

カート・セッションに夫婦のどちらか一方でも参加しているイエメン人家庭、女性の社会進出が進み、夫婦共働きがごく当たり前になっている家庭、あるいは母親は専業主婦でも父親は残業続きで平日は子供に会えないような家庭の中で、どれが子供にとって望ましい環境なのか。カートだけが家庭崩壊の引き金となるわけではない。母親がカート・セッションに子供を連れて行き、年齢の異なる子供たちと遊ぶことは子供にとって好ましいし、育児から数時間解放されることは母親にとっても良いことだといえるだろう。

(4) 環境への影響

環境への影響で特に問題視されるのが地下水である。大量の地下水がカート栽培に使われるため、カートが地下水の枯渇を引き起こすであろうことが指摘されている。カートに利用される農業用水は、農業、工業、生活などすべての地下水量の3分の1に相当すると考えられる[FAO 2002: 2-5]。2度と再生されない化石帯水層から汲みあげることで、未来の農作物さえも失っていることになる[World Bank 2007: 2]。

ただし問題は水の汲み上げすぎだけでなく、灌漑用水を効率的に利用できていないことも関係している。現在の灌漑システムでは大量の水を無駄にしている[Tutwiler 2007: 237]。技術的な問題はクリアされるべきであろう。

カートの水分蒸発を避けるため、現在ではほとんどのカートがビニール袋やビニールシートで覆われて運搬、売買されるが、このビニール袋が環境問題を引き起こしているとして、カートを間接的に非難する記事も見られる[Yemen Times 2007: 1075]。ただしビニール袋は何を購入してもほぼ使われるものなので、ビニール袋の問題をカートだけに帰せるのはいきすぎである。

(5) 労働力の損失

カートの消費はタバコのように数分で終わるものではなく、数時間かけるのが一般的であるから、カートを消費することは時間を無駄にすることである。FAOの概算によると、イエメンの全労働時間のうち27%がカート消費に費やされている[FAO 2002: 16]。

しかしカートには雇用創出の一面があるのを見落としてはならない。カートはGDP(2005年)の6%を占め、イエメン人の労働者の7人に1人はカートに関係する仕事(生産や流通)に就いている。カートはまたイエメンの農地の10%を占めるにすぎないが、農業GDPの3分の1を占め、農業労働力の3分の1がカート生産に携わっている[World Bank 2007: 1]。実際のところ、毎日午後に仕事をしないでカートを噛んで過ごせるイエメン人は少数であり、週末だけ噛む人や噛みながら働く人、カートを噛んでから夕方以降に働き出す人も少なくない[大坪 2005]。

比較する項目が異なるが、日本およびヨーロッパ諸国では各国とも睡眠、食事、仕事以外の自由時間は平均して4時間半ある(表7)。娯楽施設が少ないイエメンで、イエメン人がカートに数時間費やすことは突出して長いといえるだろうか。

(6) 食料自給率の低下

イエメンの食料自給率は1961年(北イエメン)では90%だったが、1992年(統合イエメン)には38%にまで落ちた[Tutwiler 2007: 224]。また日本の農林水産省によると、イエメンの穀物自給率は13%である²²。栄養不良は人口の37%(2001~2003年)に達し、食料輸入額は輸入額全体の27.9%(2002~2004年)を占める[FAO 2006]。

食料の安全保障の点から考えれば、「通常食物」にも「通常薬」にもならないカートは真っ

【表7】男女、行動の種類別総平均時間（週全体、有業者）

		(時間、分)								
		日本	ベルギー	ドイツ	フランス	ハンガリー	フィンランド	スウェーデン	イギリス	ノルウェー ^{*)}
男	個人的ケア	10.32	10.36	10.21	11.21	10.36	10.07	9.58	10.06	9.51
	睡眠	7.44	8.01	7.60	8.24	8.08	8.12	7.53	8.11	7.53
	身の回りの用事と食事	2.48	2.35	2.21	2.58	2.28	1.56	2.05	1.55	1.58
	仕事と仕事中の移動	7.10	4.58	4.54	5.42	5.22	5.24	5.09	5.33	4.46
	学習	0.13	0.05	0.11	0.02	0.05	0.08	0.07	0.09	0.11
	家事と家族のケア	0.51	2.15	1.52	1.53	2.07	1.59	2.22	1.54	2.12
	自由時間	3.41	4.23	5.07	3.49	4.39	4.55	4.47	4.34	5.33
	ボランティア活動	0.04	0.10	0.15	0.13	0.10	0.11	0.11	0.06	0.09
	他の自由時間	3.37	4.13	4.52	3.36	4.29	4.44	4.36	4.27	5.24
	うちテレビ	2.00	1.56	1.45	1.46	2.24	2.03	1.48	2.14	1.58
	移動	1.29	1.43	1.31	1.10	1.10	1.17	1.32	1.36	1.24
	うち通勤	0.50		0.36	0.37	0.38	0.25	0.28	0.39	0.31
	その他	0.05		0.04	0.03	0.00	0.10	0.05	0.07	0.04
	女	個人的ケア	10.31	10.53	10.42	11.35	10.38	10.24	10.27	10.32
睡眠		7.28	8.16	8.11	8.38	8.18	8.22	8.05	8.25	8.08
身の回りの用事と食事		3.03	2.36	2.31	2.57	2.20	2.03	2.23	2.07	2.03
仕事と仕事中の移動		5.12	3.48	3.33	4.30	4.37	4.07	3.55	3.54	3.28
学習		0.14	0.05	0.19	0.02	0.08	0.13	0.10	0.12	0.18
家事と家族のケア		3.23	3.52	3.11	3.40	3.52	3.21	3.32	3.28	3.25
自由時間		3.16	3.51	4.44	3.05	3.43	4.30	4.22	4.13	5.18
ボランティア活動		0.04	0.07	0.12	0.09	0.06	0.11	0.10	0.11	0.07
他の自由時間		3.12	3.45	4.33	2.56	3.37	4.19	4.13	4.02	5.11
うちテレビ		1.52	1.36	1.27	1.23	2.05	1.40	1.26	1.51	1.27
移動		1.16	1.30	1.27	1.05	1.02	1.16	1.28	1.33	1.17
うち通勤		0.33		0.24	0.30	0.30	0.23	0.23	0.27	0.24
その他		0.07		0.05	0.04	0.00	0.08	0.05	0.09	0.04
調査年月		2006.10	1998.12～ 2000.2	2001.4～ 2002.4	1998.2～ 1999.2	1999.9～ 2000.9	1999.3～ 2000.3	2000.10～ 2001.9	2000.6～ 2001.9	2000.2～ 2001.2

*) 学習は学校での学習のみ。

注) 国により定義の相違があるため、比較には注意を要する。

出典：日本は「平成18年社会生活基本調査 詳細行動分類による生活時間に関する結果」。小分類レベルでEU比較用に組替えた行動分類による。
EU諸国はEUROSTAT, "Comparable time use statistics - National tables from 10 European countries - February 2005"(出所) <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001009957&cycode=0>

先に槍玉に挙がる農作物である。確かに食料自給率は下がっているが、カート畑だけが增加しているわけではない。実際のところコーヒー、果物、野菜の作付面積や生産量も増加している[大坪 2012]。

カートの利益は他の農作物よりずっと大きい。1991年のデータであるが、年間1ヘクタールあたりの利益は、カートが25万リヤルであるのに対し、ブドウが9万リヤル、バナナが8万リヤル、野菜が5万リヤルである[Gatter et al. 2002:78]。穀物と比較すると、カートは1ヘクタールあたり20倍の利益になる[Fergany 2007:8]。筆者のインタビューしたA村のムハンマド氏によると²³、カートは1ルブナ(≒11×11m)あたり8～10万リヤルの収入になる(1ドル≒192リヤル)。これから必要経費(灌漑用水、化学肥料、農薬、見張り代、見張りに持たせるライフルの銃弾代など)が25～30%かかる。一方、豆類やトマトは、カートの利益の10%程度にしかならない。生産者に対し、利益の低い農作物を勧めることは容易ではないだろう。

おわりに

嗜好品と薬物の境界は各国の法律で決まるきわめて政治的な境界であり、科学的な境界ではない。その境界は時代によっても変化してきた。現在薬物として扱われている多くの物質もかつては交易品でありクスリであった。その意味で現在薬物として規制されているものは、かつて嗜好品だったといえる。嗜好品の消費が広まった理由は2つある。それを消費して得られる刺激と、売る側が得られる利益が大きかったからである。そして嗜好品は課税する政府にも魅力的な商品であった。

嗜好品を取り締まり対象とすることはそれを薬物と認め、課税対象から外すことであり、政府は貴重な財源を失うことになる。20世紀初頭に薬物を国際的に規制するのにアメリカを除く各国が乗り気ではなかった[佐藤 2006]のも、貿易による利益が大きかったからであり、薬物の規制には政治的な判断が大きく関わっている。

現在カート的位置は、世界的に見れば嗜好品よりも薬物に傾いている。ソマリア系移民にとってカートは一種のアイデンティティ・マーカースとなっているが、それゆえいくつかの国では排除すべき対象となっている。カートの取引による利益が当該国にプラスになっていないことや、カートが移民先の現地の人々に広まっていないことも、一層われわれ対彼らという排除の図式を成立しやすくしている。この状況は下層階級の人々が専ら嗜むようになったことで攻撃しやすくなったタバコや、1世紀前の麻薬とよく似ている[cf. コートライト 2003 : 295]。

イエメンではカートは嗜好品と位置づけられているが、しかし社会問題の根源として様々な責任を負わされている点において、カートの扱われ方は薬物に近い。カートが社会問題の根源として扱われていることは、1970年代から指摘されている[Halliday 1974 : 89]。

カートは確かに心身にも家庭にも国家にもマイナスの影響を及ぼす。カートを嗜む習慣のない外国人の目から見れば、午後の数時間、片頬をカートで膨らませて²⁴過ごすイエメン人の姿は異常に見えるだろう。エスノセントリズムという言葉は人類学では使い古されたものであるにもかかわらず、カートに関してはこの古臭い概念が無意識に発動されているのである。しかもカートをスケープゴートにすることは問題をすり替えることであり、何ら解決につながらない²⁵。

もちろんイエメン人が「カート漬け」になることを筆者は望んでいない。しかしカートをやめるかどうかはイエメン人の決めることである。両大戦間期にイギリスで娯楽の増加によって飲酒が減った[見市 2001 : 306]ように、娯楽の多様化が進めば、カートへの依存も減ることになるだろう。現在ではカートは消費形態が多様化し、カートを嗜まないあるいはやめるということも選択できる。生産者がカートを自主的に他の作物に転作したり、カートなしの結婚式が行われたりといった事例も散見できる[Yemen Times 2005 : 847, 2012 : 1551, 2012 : 1635]。国民的嗜好品を禁じることの難しさと愚かさ[ヌリッソン 1996 : 212-228; 高田 1998 : 318; 見市 2001 :

322]は歴史的に明らかである。

(おおつぼ れいこ・高崎経済大学地域政策学部非常勤講師)

参考文献

- 飯田 操『パブとビールのイギリス』平凡社. 2008.
- 上野堅實『タバコの歴史』大修館書店. 1998.
- 大坪玲子 イエメン・サナアにおけるカート消費の変化. 日本中東学会年報 20-2 : 2005. 171-196.
『嗜好品カートと現代イエメンの経済・社会』博士論文. 2012.
- 角山 栄『茶の世界史』中公新書. 1980.
- 窪田金次郎監修『誰も気づかなかった嗜む効用：咀嚼のサイエンス』日本教文社. 2002.
- コートライト (小川昭子訳)『ドラッグはいかに世界を変えたか』春秋社. 2003.
- 小林章夫『コーヒー・ハウス』駈々堂. 1984.
- 佐藤哲彦『覚醒剤の社会史』東信堂. 2006.
『ドラッグの社会学』世界思想社. 2008.
麻薬・文明・万能薬：薬物の原初的使用とその伝播. 佐藤哲彦・清野栄一・吉永嘉明『麻薬とは何か』2009. 18-64. 新潮選書.
- シヴェルプシュ (福本義憲訳)『楽園・味覚・理性：嗜好品の歴史』法政大学出版局. 1988.
- 高田公理 禁酒文化・考. 石毛直道編『論集酒と飲酒の文化』1998. 295-321. 平凡社.
はじめに. 高田公理・栗田靖之・CDI編『嗜好品の文化人類学』2004. 1-8. 講談社.
- 田所作太郎『麻薬と覚せい剤』星和書店. 1998.
- 沢沢敬三編『明治文化史 第十二巻』洋々社. 1955.
- ヌリソン (柴田道子・田川光照・田中正人訳)『酒飲みの社会史』ユニテ. 1996.
- 古田紹欽『喫茶養生記』講談社. 1982.
- ベンダーグラスト (樋口幸子訳)『コーヒーの歴史』河出書房新社. 2002.
- 見市雅俊 パブと飲酒. 角山栄・川北稔編『路地裏の大英帝国』2001. 301-338. 平凡社.
- 宮本又郎 酒と経済. 山崎正和監修『酒の文明学』1999. 135-183. 中央公論新社.
- 村井康彦『利休とその一族』平凡社. 1987.
- 村上了太『日本公企業史：タバコ専売事業の場合』ミネルヴァ書房. 2001.
- 矢部良明『千利休の創意』角川書店. 1995.
- 柳田国男『木綿以前の事』岩波文庫. 1979.
- ACMD (Advisory Council on the Misuse of Drugs) *Khat(Qat): Assessment of Risk to the Individual and Communities in the UK*. London: British Home Office. 2005.
- Anderson, D., Beckerleg, S., Hailu, D., and Klein, A. *The Khat Controversy: Stimulating the Debate on Drugs*. Oxford: Berg. 2007.
- Brooke, C. Khat (Catha Edulis): Its Production and Trade in the Middle East. *Geographical Journal* 126: 1960. 52-59.
- Colton, N. A. Political and Economic Realities of Labour Migration in Yemen. In *Yemen into the Twenty-First Century: Continuity and Change*, eds., Mahdi, Würth and Lackner, 2007. 53-78. Reading: Ithaca Press.
- Cox, G., and Rampes, H. Adverse Effects of Khat: A Review. *Advances in Psychiatric Treatment* 9: 2003. 456-463.
- FAO *Draft Technical Report: Towards the Formulation of a Comprehensive Qat Policy in Yemen*. FAO. 2002.
The State of Food and Agriculture. FAO. 2006.
- Fergany, N. Structural Adjustment versus Human Development in Yemen. In *Yemen into the Twenty-First Century: Continuity and Change*, eds. Mahdi, Würth and Lackner, 2007. 3-30. Reading: Ithaca Press.
- Gatter, P., Abdul Malik, Q., and Sae'ed, K., eds. *National Conference on Qat: Conference Discussion Materials*. Sana'a: the Ministry of Planning and Development and the Ministry of Agriculture and Irrigation. 2002.
- Gavin, R. J. *Aden under British Rule 1839-1967*. London: C. Hurst and Company. 1975.
- Gebissa, E. *Leaf of Allah: Khat and Agricultural Transformation in Harerge, Ethiopia 1875-1991*. Oxford: James Currey. 2004.
- Gerholm, T. *Market, Mosque and Mafraj: Social Inequality in a Yemeni Town*. Stockholm: University of Stockholm. 1977.
- Gough, S. P. and Cookson, I. B. Khat Induced Schizophreniform Psychosis in UK (letter). *Lancet* 455. 1984.
- Halliday, F. *Arabia without Sultans*. Baltimore: Penguin. 1974.
- Kennedy, J. G., Teague, J., Rokaw, W., and Cooney, W. A Medical Evaluation of the Use of Qat in North Yemen. *Social Science and Medicine* 17: 1983. 783-793.
- Lackner, H. P. D. R. *Yemen: Outpost of Socialist Development in Arabia*. London: Ithaca Press. 1985.
- Messick, B. M. Transactions in Ibb: Economy and Society in a Yemeni Highland Town. Ph. D. diss., Princeton University. 1978.
- Al-Motarreb, A., Baker, K., and Broadley, K. J. Khat: Pharmacological and Medical Aspects and its Social Use in Yemen. *Phytotherapy Research* 16: 2002. 403-413.

- Al-Mugahed, L. Khat Chewing in Yemen: Turning over a New Leaf. *Bulletin of the World Health Organization*. 2008. 741-742.
- NID (Naval Intelligence Division) *Western Arabia and the Red Sea*. Naval Intelligence Division. 1946.
- Serjeant, R. B. The Market, Business Life, Occupations: The Legality and Sale of Stimulants. In *Ṣan'ā': An Arabian Islamic City*, eds. Serjeant and Lewcock, 1983. 161-178. London: World of Islam Festival Trust.
- Tutwiler, R. N. Research Agenda for Sustainable Agricultural Growth and National Resource Management in Yemen. In *Yemen into the Twenty-First Century: Continuity and Change*, eds. Mahdi, Würth and Lackner, 2007. 221-248. Reading: Ithaca Press.
- UNODC Khat. *Bulletin on Narcotics*, 1956 issue4. 1956.
(http://www.unodc.org/unodc/en/data-and-analysis/bulletin/bulletin_1956-01-01_4_page004.html#f065 accessed 13 Feb 2013)
- Catha edulis (khat): Some Introductory Remarks. 1980.
(http://www.unodc.org/unodc/en/data-and-analysis/bulletin/bulletin_1980-01-01_3_page002.html accessed 22 Apr 2013)
- Varisco, D. On the Meaning of Chewing. *International Journal of Middle Eastern Studies* 18: 1986. 1-13.
The Elixir of Life or the Devil's Cud: The Debate over Qat (Catha edulis) in Yemeni Culture. In *Drug Use and Cultural Contexts 'Beyond the West'*, eds. Coomber and South, 2004. 101-118. London: Free Association Books.
- Weir, S. Economic Aspects of the Qat Industry in North-West Yemen. In *Economy, Society and Culture in Contemporary Yemen*, ed. Pridham, 1985. 64-82. London: Croom Helm.
- World Bank *Yemen: Towards Qat Demand Reduction*. Report No. 39738-YE. 2007.
- Yemen Times (<http://www.yementimes.com/> accessed 22 Apr 2013)

統計年鑑

独立前の南イエメンの統計年鑑

Annual Report (The Treasury発行)

1957, 1958, 1959, 1960, 1961, 1962, 1963, 1964

Statement of External Trade (the Ministry of Commerce and Industrial Development発行)

1962, 1963, 1964, 1965, 1966

北イエメンの統計年鑑

NYSY (North Yemen Statistical Yearbook) (Central Planning Organization発行)

1970/71, 1971, 1972, 1973, 1974, 1975/76, 1976, 1976/1977, 1979/80, 1981, 1982, 1983, 1984, 1985, 1986, 1987, 1988

註

- 1 イエメンではカート、エチオピアでチャット、ケニアではミラーと呼ばれているが、本稿ではカートで統一する。
- 2 イエメン共和国は1990年に南北イエメンが統合して成立した。
- 3 大麻取締法参照。<http://www.houko.com/00/01/S23/124.HTM> (2013年4月22日閲覧)
- 4 本節は佐藤(2008)に基づく。
- 5 病気や怪我を治すといった、身体に良い影響を及ぼす薬物をさしあたりクスリと表現する。薬物とクスリが単純に区別できないことは註6を参照。また現在嗜好品と見なされているものも、当初はクスリとして扱われていたことは次章で述べる。
- 6 アヘンは19世紀のイギリスにおいては鎮痛剤、鎮静剤として一般的に使われていた。その役割は今日のアスピリンに似ており、家庭の常備薬であり、薬局でも自由に手に入れることができ、値段も比較的安かった[シヴェルブシュ 1988: 216]。また1940年代の日本では覚醒剤は薬局で買えるクスリだった[佐藤 2009: 147-151]。
- 7 イギリスは1971年の薬物濫用法によって犯罪化政策に方向転換し、ドラッグ使用者を犯罪者として刑務所などに隔離する政策をとるようになったが、その一方で嗜癖者を患者として処遇するシステムをその一部に保存してきた[佐藤2008: 202]。
- 8 http://www.unodc.org/documents/wdr/WDR_2009/WDR2009_eng_web.pdf (2013年4月22日閲覧)
- 9 本文で紹介する以外のヨーロッパ諸国の対応はACMD (2005: 14) 参照。
- 10 Class Aはコカインやモルヒネなど最も有害なもの、Class Bはその下で、アンフェタミンや大麻など、Class Cは最も有害ではないものとしてalprazolamなどの精神安定剤などである。<http://www.legislation.gov.uk/ukpga/1971/38> (2013年4月22日閲覧)
- 11 http://www.deadiversion.usdoj.gov/drug_chem_info/khat.pdf (2013年4月22日閲覧)
- 12 ただしアメリカではコーヒーは最初家庭で飲むものとして広まり、コーヒーハウスは後から出現した[ペンダーグラスト 2002: 84, 209]。
- 13 タバコはヨーロッパや日本においても奴隷制なくして栽培が可能であった[上野 1998]。
- 14 イエメン人は19世紀末からイギリスに移住し始めたが、カーディフ、リバプール、ロンドンへ移住した彼らがカートを消費した証拠はないようである[Anderson et al. 2007: 151]。

嗜好品か薬物か：イエメンが抱えるカート問題

- 15 Maktari, MawiyaはどちらもGavin (1975) の表記のまま。後者はタイズ近郊の生産地で、現在でもタイズで人気がある。2003年、2009年の調査による。
- 16 トルーシャルステーツは現在のアラブ首長国連邦の旧称。トルーシャルステーツにはバーレーンも含まれていたが、出所ではバーレーンとトルーシャルステーツが併記されていたので、そのままにしてある。
- 17 1972年の統計年鑑ではカートのSITCは292.40、1974/75年では111である。
- 18 カートのデータはその後抹消され続け、南北イエメン統合後の1997年の統計年鑑からカートのデータが再び公表されるようになった。カートが薬物に類すると考えられたから抹消されたと考えられる。
- 19 男女の生活空間の分離が比較的厳密なイエメンでは、男女は基本的に分かれてカートを嘔む。兄弟姉妹や夫婦がカートを嘔むことは問題ないが、前者は稀である。
- 20 カートを嘔む午後の集まりを指すアラビア語はマクヤル、ジャリサ、タフリタ（主に女性の集まり）などあるが、本稿ではセッションとする。
- 21 教養娯楽費の中に、教養娯楽用耐久財、教養娯楽用品、書籍・他の印刷物、教養娯楽サービスが含まれるため、カートだけと比較するのは大雑把である。ちなみに外食代、酒代はそれぞれ4.7%、1.1%である。イエメンでは外食は娯楽として広まっておらず、居酒屋も酒屋もない。<http://www.stat.go.jp/data/kakei/2008np/gaikyo/pdf/gk01.pdf> (2013年4月22日閲覧)
- 22 http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/013.html (2013年4月22日閲覧)
- 23 2009年8月にインタビュー実施。A村はサナア州西部にあるマフウィート州にある。
- 24 イエメンではカートを嘔んだら片頬に溜めていくため、片頬が大きく膨れる。セッションの最後に溜めたカスを吐き出す。
- 25 Ⅲで紹介した環境以外の問題は、北イエメン時代から指摘されてきた。南イエメン時代は現地調査が限られていたため、北イエメンに比べて南イエメンのカート研究が少ないが、規制がある程度成功していた南イエメンにおいても、カートは社会問題を引き起こす元凶と見なされていた。Lackner (1985: 119) 参照のこと。